

第 2 回定例会 発言要旨

1 サービスの DX	
<p>東京都にも 55 万人近い外国人住民が住んでいるが、そういった方々もこの DX が進むことによって図書館利用がしやすくなると思う。日本語の識字の問題が外国人の方々にはあるので、読みたいものがなかなか読めない方々も、自動翻訳などによって非常に読みやすくなるだろう。また、外国の方々は、海外から日本に来て、母国とつながるためにデジタルを駆使されており、利用方法に関しては圧倒的によくご存じなので、多分先行して、こういった利用ができるのではないかと。ぜひ進めていただければと思う。</p>	新居委員
2 資料の DX	
<p>デジタルアーカイブを構築しても、そこから活用がなかなか進まないといった話を聞く。そのあたりの活用方法の提案を館内、それからオンラインでも進めていく必要があると思う。</p>	和気委員
<p>「サービスの DX」にも関わる話だが、そもそもなぜデジタルアーカイブというものを構築する必要があるのか、どう活用していけるのかというあたりを、情報リテラシー教育も併せてオンライン・対面とで進めていく必要があるのではないかと。従来の情報リテラシー教育に加えて、オープンデータとは何なのか、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスというものは何なのか、デジタルアーカイブ上にどのように表記されていて、オンラインの資料を著作権に配慮しながらどう活用していけるのかといった内容が含まれた教育を、（活用方法の提案と）併せて進めていく必要があるのでは。それによって、デジタルアーカイブ上の資料の活用につながっていくのではないかと。</p>	和気委員
3 施設空間の DX	
<p>アメリカの大学は、メイカースペースを活用して、特に視覚障害を持った方に 3D プリンターなどを使って点字資料を作ったり、耳で聞いたお話の世界を 3D で造形して、お話の世界をより膨らませていたりという活動をしている。そういった形でメイカースペースを活用していくこともできるかもしれない。</p>	和気委員
<p>偶然性というのがとても好きで、図書館が好きだったので、DX でそれが保てるのかという心配があったが、仮想書架のような形で本棚が見えるというのは、とても親近感が湧いた。私ぐらいの年代の人も、これならやってみようという気になると思う。DX を考える上で、Z 世代に向けてというのは大切なことだが、年配者もたくさん本を読んでいる。わかりやすさ、使いやすさを考えていければ、年配者も親しみやすいのではないかと。</p>	赤羽委員
4 マネジメントの DX	
<p>年に 1 回サービス利用者の方に対して利用実態・満足度調査をされていると思うが、サービスの DX が進むと、ユーザーの登録情報などから、誰がどんなサービスを使っているのかということを実タイムで把握できる。最近、一般的なタクシーのアプリなど、色々なサービスのアプリを使うと、サービス利用後に「星幾つ」のような簡単なアンケートを実施しているものが多い。そういった仕組みも、もしかしたら参考にされると、年一の調査を待たずとも色々な PDCA を回していけるのかなと感じた。</p>	久我委員

4 マネジメントの DX

<p>個人データに関しては、どのくらい保有しているのかということもある。また、図書館業界には「図書館の自由に関する宣言」など、利用者の利用履歴等についてはしっかりと守っていくという規範がある。DX はこうしたデータの分析が重要なものなので、難しいところは確かにあると思うが、匿名化技術など、色々な工夫ができるのかもしれないと思っている。</p>	<p>松本 副議長</p>
<p>組織を作るというのは重要な観点。併せて DX 人材の育成という観点も、かなり重要になってくると感じる。</p>	<p>久我委員</p>
<p>組織、人材の育成という点は、よく研修活動などの DX という文脈で、ここのところ取り上げられてきているところにも関係する。</p>	<p>小田議長</p>

5 DX 推進のリーダー

<p>母語保持の視点で考えると、日本に住んでいる外国人の方々が日本にいながら都立図書館を通して世界につながっていったら、母語の部分を読むことができれば良いだろうし、逆に、海外にも 136 万人近い日本人の方が住んでいるので、首都東京というところを生かして、日本語を読むことができるというものが進むと、都の図書館が進める意味があるかと思う。購入する書籍ではなく、図書館のものを借りたいというものは一体どういうものなのか、その視点を大事にしていくことも重要。</p>	<p>新居委員</p>
<p>電子書籍で学校図書館と連携している公共図書館はほとんどない。ぜひ、都立図書館から学校に対し、学校教育における情報リテラシーやアーカイブの利用などを勧めていただきたい。最近、ジャパンサーチを使った GIGA スクールにおける教育実践が注目されている。小学校であれば「地元を学ぶ」「東京都の歴史を学ぶ」といった授業があるが、こういうときこそ、都立図書館の資料を積極的に各学校で利用していただく方法を、都立側から提案していくことが必要ではないか。</p>	<p>植村委員</p>
<p>学校（図書館）の職員と都立図書館、それから生徒と都立図書館というところのパイプは、とてもまだ細いという印象。デジタル化が進むことによって、その垣根というかハードルが下がっていく、情報が共有できるということは非常に有意義なのではないか。都立高校の 13 万人の生徒は、Teams の ID をみんな持っている。学校と図書館が同じ教育に携わるというところで連携して使えるようになってくると、都立高校生 13 万人と教職員というのが次世代につながっていくのではないかと期待もあるのではないかなと思う。</p>	<p>小林委員</p>
<p>高等教育においても、何らかの形で図書館にご協力いただきたい。例えば東京都内における大学図書館がアクセシブル化した図書を何らかの形でネットワーク化していく、そういったところにも協力していただきたいと思う。</p>	<p>関根委員</p>

6 プラットフォーム・既存技術の活用

<p>自動翻訳は、圧倒的に東京都在住の外国人の方々がこの領域を求めていると思う。特に、公的資料（市販されている書籍ではなく、図書館が集めている東京都や市町村の書類など）が、こういったところを通してデジタル化されて一同に読むことができれば、非常に生きていく中で有用かと思う。なかなか市町村ではそこまでできないので、行政書類も含めてコンテンツの情報収集と自動翻訳的なものが入っていくと良い。</p>	<p>新居委員</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------